

久志本常孝先生を悼む

日本医史学会常任理事 深瀬泰旦

本会名誉会員・東京慈恵会医科大学名誉教授久志本常孝先生は、昨年八月二日午前六時三〇分に逝去された。享年七十七歳であった。

先生は大正九年一月八日にお生まれになり、昭和二〇年九月に東京慈恵会医科大学を卒業された。卒業後ただちに医学教室——慈恵医大では開設から現在にいたるまで、生化学ではなく医化学教室の名称を使用している——の助手として、研究者の道をあゆみはじめた。昭和二五年一月医化学講師に任命されており、わたくしが学部一年のおりには先生から医化学の講義をうけたことがある。わたくしにとっては大先輩にあたる。



故 久志本常孝先生

昭和二九年医化学教室から航空医学心理学教室に転じられた。第二次大戦後連合軍から禁止されていた航空関係の活動が昭和二七年に解禁されて、新しい学問分野としての航空医学が注目を浴びるようになって新設された研究室であった。昭和三二年一月助教に昇進され、その後昭和三五年四月に医学進学課程が新設されるにさいしては、生物物理化学教授として、また翌昭和三六年には教務委員長として学生の教育と指導にあたられることになった。この間昭和三〇年には早稲田大学理工学部を卒業するという異色の経歴ももっており

る。

昭和六〇年三月に進学課程長を最後に定年退職されるまでの二五年間、プレメディアカル・コースの学生の教育に情熱をかたむけておられた。昭和五九年にわたくしを慈恵医大の医史学講師に推薦してくださったのは先生であり、さらに先輩にあたる大滝紀雄先生のお口添えがあったことももちろんである。

先生と医史学の関わりについては、先生ご自身の「医史学と私——遍歴の跡」と題する回顧の一文が、『日本医史学雑誌』（三五巻三号・平成元年）に掲載されている。それによると「医史学会の末席を汚すすでに三十年近くになる」とあるように、学会に入会されたのは昭和三十五年ごろである。ちょうどそのころ、先生は名古屋での日本医学会総会の帰途、先祖の地である伊勢にたちよって、墓参をかねて神宮文庫の古籍籍を調査された。

久志本氏の遠祖をたずねると、神代の昔までさかのぼることができる古い家柄である。天孫降臨のさい供奉したといわれている天牟羅雲命が遠祖であり、さらに天御中至尊までさかのぼることができるのを、『度会氏系図』によってしることができるといふ、気の遠くなるような話である。降って江戸時代、久志本氏は將軍侍医の筆頭にいたことはよく知られるが、この家が神官もかねており、「神宮医方」という特殊な医方を継承していることはあまり知られていないようである。これを契機として先生の「わが家の歴史」の研究がはじまった。

以来多忙な教職の合間をぬって、こつこつと史料をあつめ、学会の例会で発表されたこともあったようである。当時の学会の雰囲気は先生は次のようにのべておられる。

当時の医史学会は会員数が今日のように多くなく、出席された先生方はいずれも私などの年配からみれば長老の大家が多く、医史学以外の専門家も多く見受けられた。そして老大家に相応しく、新米の私などにも含蓄の深いアドバイスを与えていただけだ。そして私の目にはこの学会の姿が大変エレガントでユニークに写った。

このような雰囲気が現在でも失われていないのは、他の学会に馴れたものにとってはかえって異様にうつるようであ

る。

長年の史料集めのすえ、五年の歳月を費やしてまとめられたのが異色の医史学書『神宮医方史』（昭和六〇年）である。本書は「神宮医方」という特殊な久志本流医術の歴史と、久志本一族の歴代医師の略伝のほか、幕府医官の職制や職種を詳細に記述している、まさに異色の書といえよう。さらに慈恵医大図書館の古医書を整理してまとめられた『東京慈恵会医科大学医学情報センター図書館 古医書目録 一』（昭和六三年）も忘れられない先生の業績である。

先生はシャイな人であり、思い切りのよい方であった。定年退職後は少年時代からつづけてこられた剣道で汗をながすため、学生相手に毎週のように進学課程の体育館にかよっておられた。それでいて名誉教授の肩書きで出席しなければならぬような会合は、あまりお好みになられなかつたようである。昭和四三年以来、長期にわたつてつとめておられた当学会評議員の役職も、大学を退職されるのを機に辞任を申しでられて、名誉会員に推挙されたという経緯がある。先年わたくしは海軍軍医寮関係の論文をまとめるにあたって、いくつかの疑問点を先生におききしたことがあつた。『東京慈恵会医科大学百年史』（昭和五五年）の草稿を一人で執筆された先生は、慈恵草創期に関係の深かつたウィリアム・ウィリスやウィリアム・アンダーソンの事績にお詳しかつたのである。その際の史料にもとづいていろいろご教示いただき、わたくしの立論に強い補強をあたえていただいた。「神宮医方史」という「わが家の歴史」以外の領域でも地道な研究をつづけておられたのである。

若いころからの夢であつたパリの屋根の下でくらしたいという望みは定年後にようやくかなえられ、何ヶ月かをパリで過ごされたとおききした。「その夢から醒めたら、またいままでの貯蓄を生かして、自分の医史学の内容を深めていきたいと思う」と、「医史学と私」に記されていたが、幽冥境を異にしたいまとなつては、パリの楽しかつたにちがいない生活のご様子も、医史学のご造詣も、先生の口から直接にうかがうことはできない。